

No.17

公益財団法人地方経済総合研究所

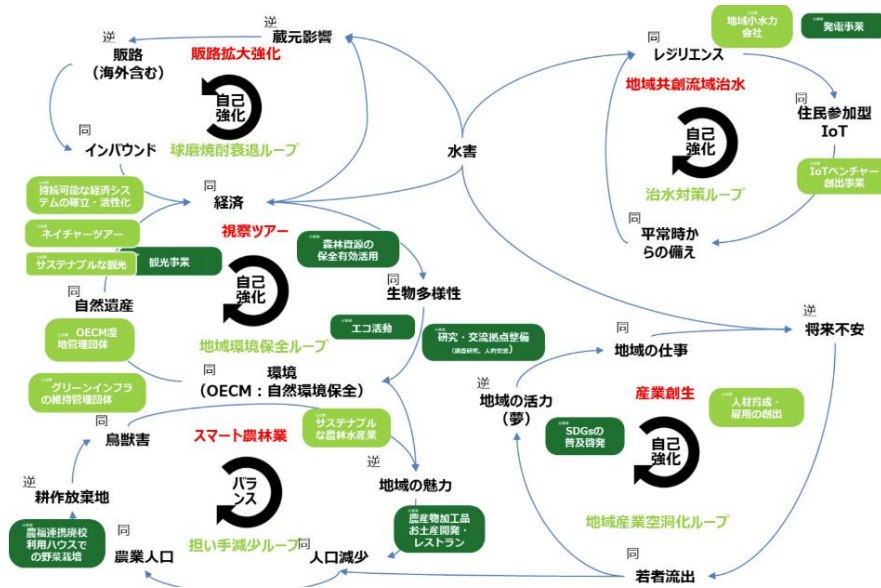
インパクトレポート (1枚目)



わたしたちの目指す地域の姿
自然、文化資本と経済資本の好循環 グリーンインフラ日本一

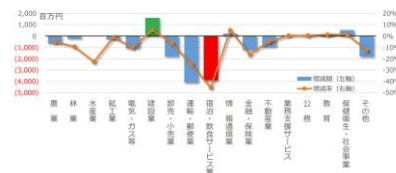


災害が発生した地域においては若年者の急激な域外流出もあり経済活動の維持、増加や幸福度の向上は非常に難易度が高い。当研究所は、熊本県立大学や熊本県、肥後銀行等と熊本県の球磨川流域で令和2年の豪雨からの復興を目指し、雨庭など地下に水を浸透させるローカルなグリーンインフラづくりと産業創成を通じて、大雨の際に球磨川に水をゆっくりと流す「地域共創流域治水」に取り組んでいる。豪雨被災は熊本県北部の白川、緑川流域でも例外ではなく、さらに台湾の大手半導体メーカーを中心に半導体ビジネス関連企業が集積しており、「くまもとの宝」である「公共水」への依存度が増し、インパクトを与えている。土地需要、水需要の急増により、これまでの地下水涵養の取組みや条例等によるネガティブインパクトを軽減させる自治体施策だけでは、ウォーターニュートラルも達成は困難であることが懸念されているため、治水だけでなく水源涵養にも有効な取組として横展開が期待できる。

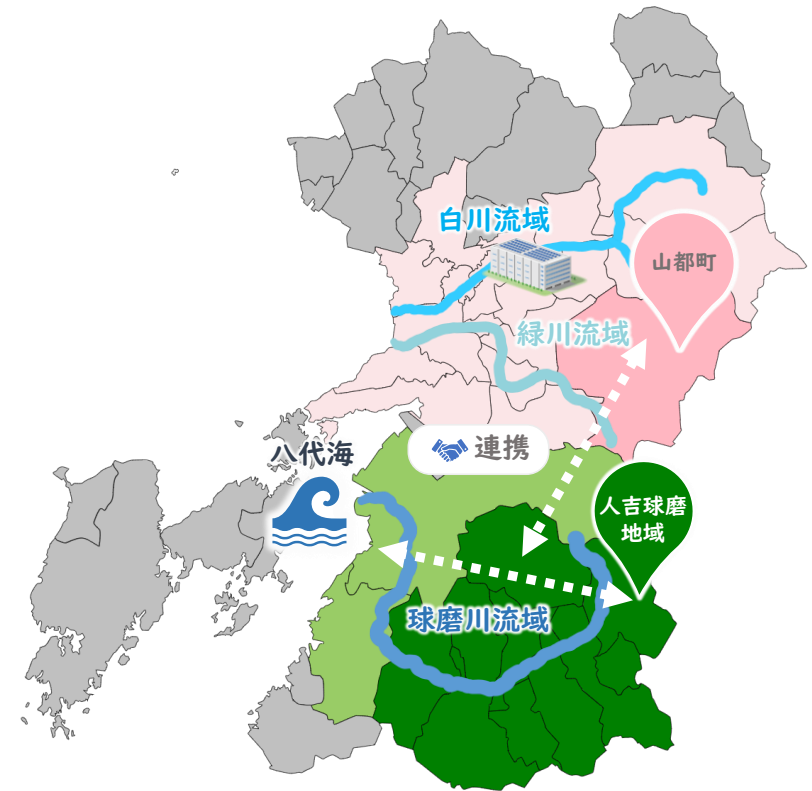
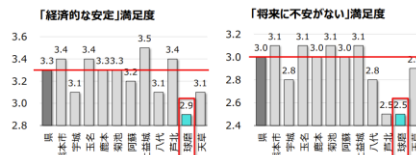


1 - (3) 球磨川流域の現状把握 GRP 山崎製団 地方経済総合研究所

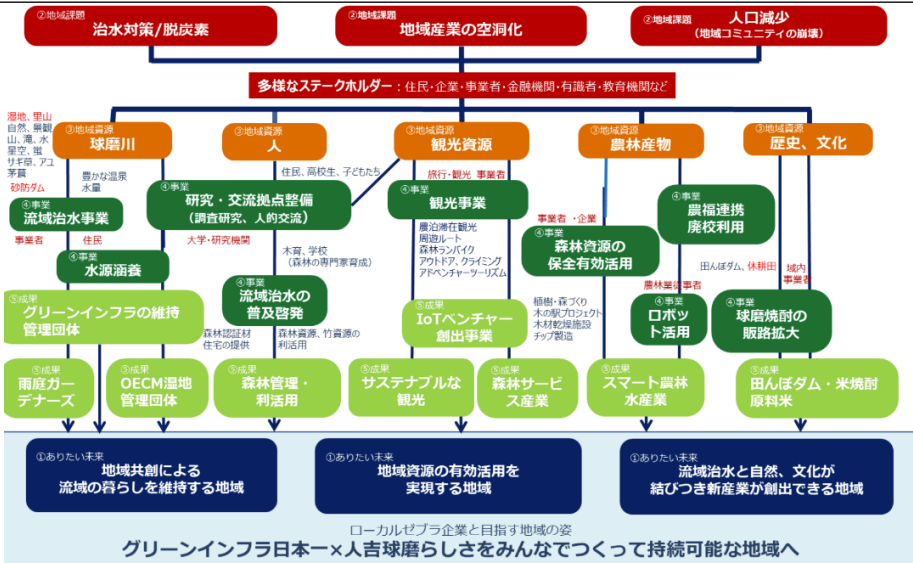
➤ 2020年度の人吉球磨地域のGRPは、2,591億円(前年度比▲133億円、▲5%)。
➤ 宿泊・飲食サービス業は、▲39億円(▲45%)と大きく減少(コロナ禍含む)。

1-(5) 球磨川流域の現状把握 幸福度(AKH) 公益財団法人 地方経済総合研究所

➤ AKH (Aggregate Kumamoto Happiness) による人吉球磨地域の評価を確認した。人吉球磨地域の主観的「幸福度」は県平均を若干下回る水準ながら、「経済的な安定」「将来に不安がない」の満足度が他の県内地域より低くなっている。



インパクトレポート (3枚目)



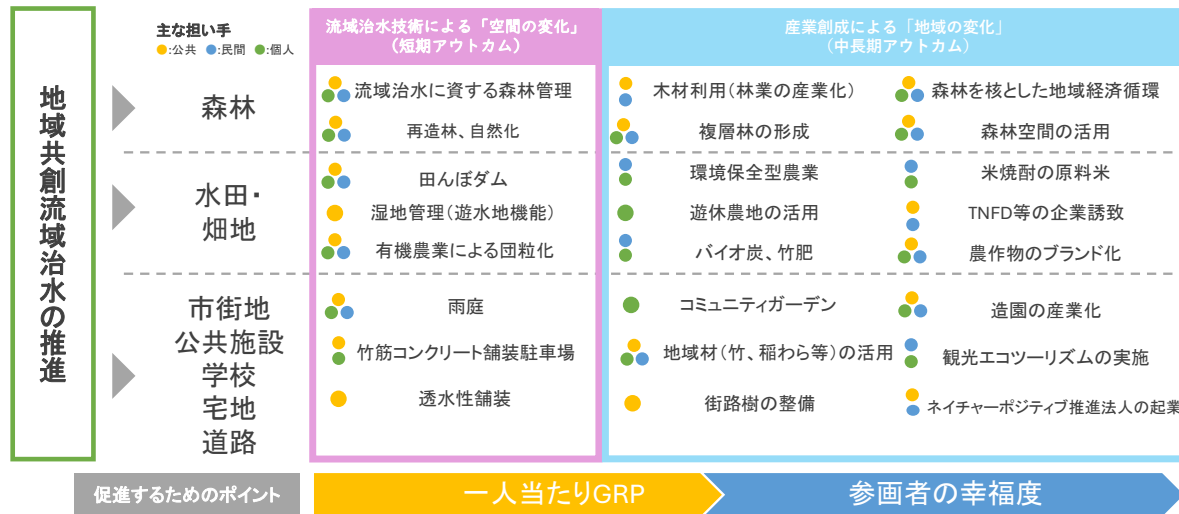
球磨川流域でのロジックモデル

インパクトを創出していく事業の概要 (ローカルゼブラ企業：第3層)

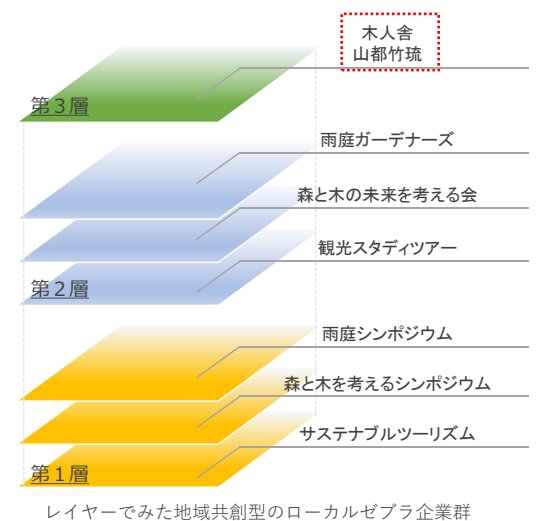
合同会社木人舎 (こびとや)
造林・保育事業等の請負にあたって、デジタルやスマート化を積極的に取り入れることで森林・林業に関わりの少ない層や若手人財へのアプローチを行い地域における魅力的な雇用創出を図る他、森林資源と建築の垂直統合により地域に付加価値を留めることで再造林の確実な推進を図り、循環型森林・林業の実現を目指す。



(株)山都竹琉 (やまとたける)
獣害や管理放棄等により荒廃した竹林整備・間伐を行い、廃竹材から土壌改良材や乳酸発酵竹粉を製造販売し、竹エキスのドローン散布：スマート農業など、竹資材を利用した米（かぐや米）の付加価値向上、世田谷区の学校給食連携等、日本一の有機農業地域づくり活動の一環として地域資源の利活用を推進。



ビジョン
流域治水×産業創成の考え方と手法に基づき、地域と共創するローカルゼブラ企業群により、グリーンインフラが実装されることで、安全・安心に住み続けられ、豊かな環境と人々が残り集う持続可能な地域となっている。



これまで取り組んできた農業、観光など流域における地域中間支援者としての機能を融合し、多様な関係者が連携し、対話が発生することによる共創の場が形成され、複合的にイノベーションが起こる環境が整いつつある。今後、地域のインテグレーター機能を担い、ローカルゼブラ企業群が地域で蓄積される流域治水の最新技術をベースに地域の潜在価値である産業を興す支援へと先進化させていくことで、「地域が変わる」好循環を創出 5